

社会福祉学科のむかしといま

(司会) 43回生 日本女子大学教授

一番ヶ瀬 康子

31回生 みどり会会長, MSW協会前会長

中 島 さつき

新6回生 横浜市民生委員

吉 田 雅 子

新9回生 弘済学園指導課長, 児童寮寮長

飯 田 雅 子

新14回生 文部省生涯学習局婦人教育課長

大 野 曜

新25回生 長谷川病院 P S W

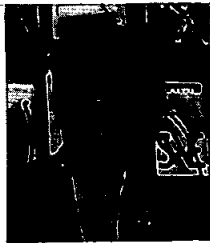
小 沢 良 子

新28回生 埼玉県浦和児童相談所児童福祉司

原 沢 優美子

新30回生 国立身体障害者リハビリテーション
センター ソーシャルワーカー

小 山 聡 子



一番ヶ瀬 最初にこの座談会の趣旨についてご説明したいと思います。実は、社会福祉学科が1つの歴史的な転期を迎えようとしているわけです。具体的に申しますならば、人間社会学部という学部を来年から文部省を通れば発足する予定でございまして、それは5つの学科を含んだ大きな学部になるのです。現代社会学科、社会福祉学科、教育学科、心理学科、文化学科、こういう構成の学部なのですが、それぞれの学科の壁は低くして、幅広い観点から人間らしいヒューマンな社会を創る、そういう人の育成をしたいと、こういうねらいになるわけです。社会福祉学科がこれの提案者かつ中心的な役割を担うようになると思うのです。私は、いま準備委員会の委員長を務めながら進めています。こういう時期を迎えたということで、ここで思いきって、目白時代を総括して新しい未来に何を望むかということで話をしていたきたいということが1つあるのです。それと同時に、ちょうどこの学科としては70周年を迎えますので、今までの機関誌よりも特大の機関誌を作って、50年史に引き続いて歴史を回顧する、そういう機関誌にしたいということにもなりました。その一環としての座談会

ということになるわけです。なお、機関誌にはいままで、お関わりになった諸先生からも原稿をいただくことになっておりまして、具体的に申しますと、大概たか先生、藤本武先生、松島正儀先生、松本武子先生、五味百合子先生、吉田久一先生、松尾均先生、江口英一先生、高月東一先生、田宮良子先生、吉田栄先生、吉沢英子先生、深沢里子先生、皆さんなつかしい先生方のお名前だと思うのですが、この先生方からは思い出をいただくことになっています。もちろん、専任のものも、また卒業生で研究職にある方にも公募して、それぞれ書くということで機関誌を作りたいということになったのでございます。そういうような2つの意義を持った機関誌の座談会だということをご理解いただきたいと思います。新学部のことについてはまた、おりがあったら申し上げたいと思いますが、社会人入学あるいは海外からの推薦入学等を、かなり積極的にやろうということで、進めております。社会福祉学部を本当は作りたかったのですが、そこまでは至りませんでした。しかし、社会福祉がねらうものというのはヒューマンな社会の実現だというふうに思いまして、人間社会学部という本邦最初の名前をつけ、それが通ったという段階です。そういうことなどもご理解いただいて、今日の座談会で思う存分発言していただきたい

いと思います。

自己紹介

今日、座談会にお集りいただいた方から自己紹介をしていただいて、進めてまいりたいと思います。研究室の諸先生のご意見を伺いまして、今日のご出席者のメンバーを選ばせていただいたのですが、まず、それぞれの時代、時代のことを語っていただくことで、歴史的に片寄りがないようにということが1つ、もう1つは、社会福祉学科の卒業生は大変幅広い活躍をしていますので、それぞれの領域を代表して発言をしていただきたいということで、多士才々の方にお集りいただいているわけです。それぞれの先生が、それぞれ推薦をされ、おいでいただくことになったわけですので、どうぞよろしくお願いいたします。まず、最初に簡単に卒業年次、名前、現在のお仕事等自己紹介をしていただいて、それから2番目には、大学時代の思い出を語っていただいて、さらに学んだことや、新学科に期待することなど、思う存分話していただきたいなと思います。それでは、大先輩の中島先生から、簡単に自己紹介をお願いいたします。

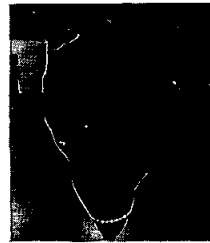


中島 はい。もう大先輩になってしまいました。私は、社会事業学部で昭和5年に入りまして昭和9年に卒業いたしました。学生時代の後半は、学内の学生運動の嵐の中にありましたので、

大学には残りませんで、私はすぐ、聖路加国際病院の医療ソーシャルワーカーとして2年働きまして満州に行き、引き揚げてまいりましてから、39歳の時東京都市に入りまして、医療社会事業をいたしました。それからずっと一筋でまいりまして、61歳のときに、兵庫医科大学教授となって定年でやめて、今、名誉教授でございます。みどり会その他では、大変ごぶさたしておりましたけれども五味百合子先生のと、みどり会の会長を2期務めております。それから、現在、桜楓会

の理事も務めております。と同時に、今一番問題になっております日本医療社会事業協会の会長としてあらゆるところで戦っております。どうぞよろしくお願いいたします。

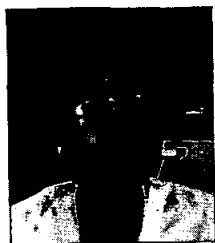
一番ヶ瀬 そのつぎが私になるわけです。私は、昭和18年、当時は家政学部三類と申しまして、社会事業学部の社会というのが好ましくないということで文部省の意見により名前を変えさせられた時代に入学をいたしました。ただ、戦争中でしたので、1年勉強をしただけであと2年は、学徒勤労動員で、蒲田製作所という工場で特攻隊の兵器を作っていました。昭和20年9月に卒業、それから補修授業をうけてから、21年3月に実質的には女子大を巣立ちました。それ以後は、昭和28年までいろいろな仕事、その中では紡績工場のカウンセラーとか教員もいたしました。大学には、28年助手に戻ってまいりまして、以来35年ぐらいいここで務めております。今日は、司会を務めます。よろしく願い致します。次は、吉田さんお願いします。



吉田 皆様方華々しい肩書がなくなりになって、公の立派なお仕事をしていらっしゃるんですけど、私は、平凡な家庭婦人です。ずっと過ごしてきましたので、こういうところにお呼ばれるのは、と申しあげたんですけど、家庭の主婦でありつつ何かしているという方も卒業生のなかには沢山いらっしゃるということを思って、思い切って出てまいりました。私は31年卒業で、先ほどお話がありましたように、当時は家政学部社会福祉学科でございました。ですから、何となく勉強の方も中途半端といえますが、社会学部じゃありませんからもの足りない思いが今も残っております。私どもが卒業してからですか、文学部になったわけなんです。私は寮生活をしましたので、寮の友達が沢山できてとてもよかったと思いますが、その頃は戦後ですから、まだまだ物資の豊富ではない時で、食べる物などちょっと辛い思いをいた

しました。結婚しまして、子どもの学校のPTAとかつねに婦人団体というものには属しております、集団の中で育てられてきたような気がいたします。民生委員を13年させていただいておりますけれども、やはり社会福祉学科を卒業しているということで社会とのつながりの中で生かしております。現在私どもの同級でした島田広子さんという方がリウマチ友の会の理事長をしておりますので、そのお手伝いをさせていただき、副理事長として手足になればと思っております。去年も、アメリカのリウマチ財団の国際会議に理事長がいきましたとき一緒についてまいりました。数年前に、桜楓会の横浜支部長をさせていただきまして、中島先生には大変お世話になりました。現在、民生委員とリウマチ友の会の副理事長をしております。どうぞよろしくお願いいたします。

一番ヶ瀬 つぎは、飯田さんよろしくお願いいたします。



飯田 私は34年の卒業でございまして、私たちのときから、文学部社会福祉学科ということで卒業いたしました。すぐに、知恵遅れの子供達の施設に指導員として入りまして、今年が卒業30周年の同窓会がある予定でございます。以来ずっと施設におり、ある意味では、障害者の福祉という分野を草分けの頃から一緒に歩いてきたという立場です。その間、施策の広がり、対象者の変遷、また、親たちが抱えている課題の変遷、そして、社会の変遷が1つの場をとおしていろいろ知ることができたように思います。学校へもときどき講義に来させていただいたりつながらせていただいております。職員として3年くらいは女子大出の方が就職して下さり、しばらく基盤になっていた時期もありました。それからしばらく滞りましたが、またここへ来て卒業生が就職してくれております。施設の仕事は女性がとてもだいいな役割を担わなければならない場所ですので、とても力強く思っております。ちょうど学生の頃は、松本武子先生

に大変お世話になりましたが、後でもでてまいりますけれども、現場と行政、政策をどうつないでいくのかをいろいろ考えていたように思います。自分自身としては、現場志向でありましたので、直接的なところへとび込んでみたいという気持ちで入ったわけです。まさに、日々変わるといっても過言ではないのが現場であるといえるように思います。どうぞよろしくお願いいたします。

一番ヶ瀬 では、今度は大野さんですね。



大野 私は、昭和35年、ちょうど60年安保が盛りあがっている最中に入学しました。全学集会とか学生あるいは学科の先生方を交えての集会などもよく聞かれ、そういう意味で大学というのはそれまでの高校生、浪人から、社会人になったという意識、大学生でありながら社会に参加したという意識をその安保闘争をとおして、先生たちや先輩たちの取り組みをとおして感じたと思います。昭和39年に卒業しまして、ちょうど今年で25年になるわけですが、飯田先生と同じように、文部省に入って、文部省しか知らない、なかでも婦人教育しか知らないんです。私たちの同級生は、地方公務員試験、国家公務員試験など公務員試験を受ける人が多かったように思います。幸い行政職の上級の乙で受かりまして、専門を生かしたいので、厚生省に行きたい、あるいはちょうど先輩である谷野先生が局長でいらっしゃる労働省とも思ったんですが、一番早く決まった文部省に入りました。先生方には大変ご心配やご迷惑をおかけしたのではないかと思います。文部省では、婦人の地位の向上につながる仕事をしたいということを、その頃はぬげぬけと言っていたんじゃないかと思うんですが、そういう希望もあってか、婦人教育課に配属され、ずっと婦人教育関係の仕事をしております。途中で、昭和52年に創設された国立婦人教育会館で約10年間仕事をして、昭和62年から、また、婦人教育課に戻ってまいりまし

た。社会福祉と直接つながらないんですけども、教育とは共通する部分や接点が多いと感じています。とくに、最近婦人の社会参加活動のなかで、ボランティア活動とか、あるいは、さきほど一番ヶ瀬先生がおっしゃったように、高齢化社会での婦人の課題を考えていきますと、福祉との接点がひじょうに多く、社会福祉学科で、私は、社会を見る目というのでしょうか、社会の中で、私たちがどういう役割を果たしていかなければいけないかという視点、それを学んだことが、今になってみますと、大きかったように思っております。

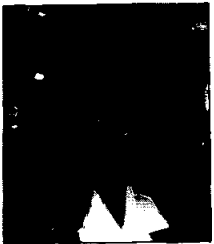
一番ヶ瀬 では、小沢さん。



小沢 私は、昭和50年に卒業をしまして、ちょうど15年目がはじまりました。卒業してから、三鷹市内にあります民間の精神病院でP S Wをやっております。卒業間際まで、どの分野に行く

のか本当に迷ってしまして、医療ソーシャルワーカーというか、人に関わる仕事をしたいと思っていました。精神科にいくつもりはなかったんですけど、たまたまそのチャンスがあって精神科に行って、初めて精神科の人達を知ったというようなかなりとまどいの中で始まりました。今ワーカーは11人いまして、古い方から2番目の位置にいます。社会事業課の課長2人の下にソーシャルワーカーが9人とソーシャルワーカーの訓練期間の人たちが同じくらいいてやっております。

一番ヶ瀬 では原沢さん、お願いいたします。

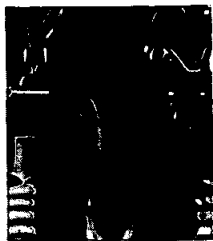


原沢 私は、昭和49年に入学して、昭和53年に卒業しています。埼玉県には、昭和54年から勤めて、最初から児童相談所という職場にあります。最初熊谷の児童相談所に5年おまして、その後、浦和にまいりまして、現在6年目です。社会福祉学科というところは、本当に立派な先輩方がいろん

な分野で活躍されている方が多くて、いつも圧倒されっぱなしだったのですが、私達が入学した時代というのは、70年闘争もおさまった、ある意味では安定したムードのなかで、そんなにつきつめられることもなく、学生時代を送ってきたような思いがあります。ただやはり、大野先生もおっしゃったように社会を見る目というのは、社会福祉学科では否応なく持たざるを得ないというか、ある意味では、私など頭でっかちな部分で、ときにははとがった見方をしながらやってきたのではないかという気がします。児童相談所で仕事をするようになったのですが、そこはひじょうに女性が活躍している場でもあります。県の中でも、生活福祉部というところは、女性が多い、ある意味では働きやすい、とくにその中でも福祉事務所などにくらべて児童相談所の方は、行政職の方もいますが、福祉職ということで入った方が多いし、女性が定着している職場でもあるので、そういう点では働きやすいし勉強になる職場だと思います。社会福祉学科のなかでみても、学科の名称の変遷からも社会福祉の流れが伺えますが、私達が職場にいても先輩、例えば、結婚して保育所も何もなかった時代から色々な運動をしながら仕事を続けてこられた女性が沢山いますので、学校でもそうだったし、社会に出てもそういう大きな流れのなかに自分がいるということ、力だけではなくて、いろんな流れのなかで自分も吸収しながら勉強してやっていくという姿勢が必要だということを、学校を出てからも仕事しながら学んできたように思います。職場の児童相談所というところは、行政的な措置機能という部分とクリニック的な部分と2つの部分があるんですけど、現在はその辺を分離して強化していこうという方向で、相談指導課、相談調査課の2部門にわかれ、クリニック部門が相談調査課という形で、登校拒否であるとか、色々な親御さんからの直接相談を扱うところに私は属しております。そういうなかで思うことは、私は、自分の子供を育てながらやっているし、本当に仕事と自分の部分がダブってくるというか、社会福祉もそうか

もしないけど仕事をするということは人のためだけではなくて、自分がある意味ではさらけ出されるし、自分も成長していかなければいけないし…ということと思っています。そういう点では逃げ場がない、ときにはきつくなるような時期もありますが、そんなときには、お互い職場で話し合ったり、相談しあいながらやってきています。社会福祉学科で何を勉強したかという、すぐには浮かんでなくて、佐藤先生の熱のこもった講義であるとか、一番ヶ瀬先生の朗々たる調子などが懐しく脳裏に浮かんできます。つくづく感じるのは大学の流れとか、仕事をしてこられた女性の流れのなかに自分もいるんだということで、仕事が続けられるということ、自分だけの力じゃなくて、まわりのおかげだとか親のおかげだとか、そういうことも、この頃になって思うようになってきたので、その分、年をとったのかな…というふうに感じております。そんなところですよ。

一番ヶ瀬 では、一番お若い方で小山さん。



小山 皆様のお話を伺って、恥ずかしいような一番の若輩でございますが、勉強させていただこうと思ひまして、参加させていただきました。私は、昭和55年、1980年に卒業いたしました、在学時代から、何となくですけども、障害者福祉をテーマにやりまして、それも対人サービスの部分というよりは、自分も含めた社会全体のリハビリ、いわゆる社会リハの概念にひかれて入ったと思います。3年生くらいの時にずっと勉強は続けて行きたいという気持ちを持ったものですから、先生にもご相談し、勉強を続けるにしても、まずは社会に出なくてはダメよということで、ご紹介もありまして、東京小児療育病院という脳性マヒ児の療育をしている病院かつ施設に就職をしまして、2年ちょっと児童指導員をさせていただきました。その後、再度チャレンジしまして、アメリカのミシガン州にあるミシガン州立大学の大学院

のリハビリテーションカウンセリング学科に入ったのです。その際飯田先生に推薦状を書いていただいたり、お世話になったんです。大学院は、教育学部のもとにあるんですけども、2年間リハビリテーションカウンセリングの勉強をしまして、帰国しましてから半年ぐらひはなかなか職が決まらず、女子大で非常勤の助手をさせていただいたり、PT、OTのリハビリテーション学院の方で少し講義をもたせていただいたりして、半年後1985年に、千葉県の鎌ヶ谷市に開設されることになった精神薄弱者の更生施設で、入所施設なんですけど、そこに就職いたしました。開設当初で大変だったのですが、1年間仕事をいたしました。その後、厚生省の現在の国立身体障害者リハビリテーションセンターから来ないかという話をいただきまして、そちらに行って、今やっと3年目です。当初は、入所関係の事務ですとか、面接をうけもちまして、肢体不自由の方達を中心的に入所相談をお受けしていたんですが、現在は、去年の4月から視力障害の方の担当ということで、指導課の方でケースワーカーをしております。私の場合は、例えば障害者福祉でもどんな障害の方を主に対象にするとか、もしくは視覚障害なら歩行訓練ができるとか、点字の訓練ができるとかそういった個別の分野に深く入っていくというのではなくて、当初から思っていた、自分も含めた社会全体のリハビリテーションというあたりにずっと焦点をあてて、これからもやっていくんだろうなという気が今しています。

一番ヶ瀬 ありがとうございます。

社会福祉学科の思い出

一番ヶ瀬 時代のそれぞれの歴史をせおって今も活躍しているご様子をうかがったわけなのですが、社会福祉学科くらい、ある意味では時代を反映した学科はないのではないかとおもいます。社会福祉学科50年史を描きましたスライドなどを見ておりまして、学生が言うんですけど、歴史のなかで本当に社会福祉を守りぬいてきたことは大変尊敬できると言ってくれるん

です。いいときもあったし、悪いときもあったし、どちらかと言うと中島先生がお入りになったときは、社会福祉学科、当時の社会事業学部に来られるだけでも大変な時期でいらっしまったと思うんですが、どうぞ、その頃の学園生活を含めて思い出、とくに印象的だったことなど、教えていただきたいと思います。

中島 私は、日本女子大の附属高等女学校に外から入りました。当時私の行ってる小学校で初めてお茶の水を受けて、すべり止めにこちちを受けたんです。そうしましたら当時は東京市電というのが鈴なり電車で有名で、試験に30分遅れて行きまして、みごと落ちまして附属へ入りました。でも、いま考えてみると附属へ入ってよかったと思います。お茶の水にいたらきっこちこちの先生になって生徒から嫌われたと思うんです。附属へ入りまして、女子大の附属は当時、ダルトンプランというのを採用してました。自分で勉強して先生のところへもっていくという方法で、私は、生涯いまに至るも結局頼るものは自分しかない、自分で切り開いていかなきゃいけないという教育を教えられたと思います。そこで、読書の楽しみも知りました。女子大の附属を卒業して社会事業学部に行くと言いましたら、当時のリーダーの先生が、社会と名のつく学部を選んだら、あなたは嫁のもらい手がない……というふうに言われましてしきりに止められましたが、正田淑子先生にお会いしまして、先生がぜひいらっしやいとおっしゃるのでそれで入ったわけでございます。当時は本当に、正田先生が冷遇されている時代で本当にみじめな大学生活を送りました。31回生から推されて、桜楓会の理事になるということは考えられませんでした。もう本当に社会科なんてとんでもないという時代でございました。考えてみると授業は、もったいないくらいいい先生がそろっておりました。まず第1に高橋誠一郎先生がおっしゃったのが、「悪貨は良貨を駆逐する」という言葉です。いまに至るも私はそれを思います。それから綿貫哲雄先生は、ちょっと砕けた先生で、お話がおもしろく、社会科の学生が少ない

ものですから方々から聴講にくるんですね。まず、第1におっしゃったのは、オーギュスト・コントとマダムボーの出会いでした。先生が最初におっしゃったのは「何かものを書くときに孫引きをするな、原書を読み、原書から資料をとれ」ということで、いまでも身につまされています。そのつぎに3年ぐらいから、戸田貞三先生が東大からおいでになって、優れた社会学をうかがいまして、感激いたしました。桑木巖翼先生の哲学とか、本当にいま考えともったいないほどの先生が日本女子大だからそろったんだらうと思い、感謝しております。生江孝之先生には4年間お習いいたしました。3年生のとき、社会事業学部が壊れるということでストライキしました。ちょうど、外からの先生方がお集りになる日で、生江先生にすごく叱られたことを覚えております。そしてとうとう家政学部三類に決まってしまうしました。ただ、私は1年のときから、日本女子大学の特色で、それは、成瀬先生の先見の明だと思っておりますけど、徳永 直の太陽のない町のモデルになったあの小石川氷川下町に西窓学園というセトルメントと日暮里の尾久町というところに桜楓会託児所というのがございまして、私は桜楓会託児所に4年間通って児童クラブを持っておりました。下町の不潔な状態の家庭を訪問しまして、当時はチフスとかコレラとかが大流行でその防疫は、まだ当時は厚生省がないので警察の防疫行政で取り締まっておりました。とにかくクラブにくる子供達がかんころ死んじゃうんです。そういうような状況を見たり、3年4年で1週間に1回見学に行きましたときに、ちょうど細井和喜蔵の女工哀史がでた頃でしたが、鐘が澁紡績株式会社に行きまして、まずびっくりしたのは、サラシの橋畔に木綿の腰巻き姿で、女工さんが機械の番をしているんです。部屋の中は蒸気で生暖かいのです。それは、木綿の糸が切れないためで、女工さんのためではないんです。女工さんを1日13時間働かせていました。鐘紡では初めわれわれを断っていたんですが、寄宿舎も見せてほしいと言いまして、寄宿舎に行きましたら、廊下をひ

とたび出ますともう寒くて、木の廊下の隅に、非番の少女達が水で髪の毛を洗っているんです。聞きましたら、1日工場にいたら綿ぼこりが頭の中に入って髪を洗わずにられない。工場はひじょうに粗食で、たくわんとまずいごはんとおみそ汁ということで、結核になるのはあたりまえなんです。そういう現場を見て、社会に対する目を開かされた感じがいたしました。

いま考えればひじょうに生きた学問をしたから、今年77歳でございますけどまだ仕事をしております。ヒ素ミルクの患者さんの兵庫県の救済対策委員長として、兵庫県の山奥まで訪問しております。やはり、そういう勉強をしたから、いまの私があるのではないかとつくづく感じております。あの頃は本当に社会事業で、いまのように措置費もありませんから、音楽会をしたり寄附を集めたりで、どこも貧しく、サラリーも低い状態でした。私は、卒業後すぐ聖路加国際病院の社会事業部に勤めました。聖路加病院は、きれいで清潔な建て物で、そこでアメリカ人のミシブスから訓練を受けました。調査し面接しというケースワークの基本を教えていただきました。それを全部英語で書けと言われまして、勉強になりました。

後年、東京都に入ってWHOから医療福祉の研究でオーストラリアに行くと言われましたときに、聖路加で英語の勉強をしてなかったら行けなかったと思っています。考えてみますと、人生というのは出会いで、自ら努力して勉強しなかったら運はむいてこないとつくづく感じました。ただ、私は、女子ばかり3人の1番上でその下に弟が2人いましたので、結婚、結婚ということで結局2年で聖路加をやめました。今でもミシブスの英語の手紙があります。「あなたが、双児だったらよかった。そしたら、あなたがやめた後もう1人が後を埋めるであろう。」という手紙で、いまでも大事にしています。

主人が満鉄関係でしたので、一緒に満州へ行きましたが、子供を3人連れて主人を残して帰ってまいりました。国際赤十字をととして手紙を出せばつくだろう

と毎日書いてたんです。それが、国際赤十字へ行かずに、マッカーサーのところへ行っていたんです。実家に子供3人連れて身を寄せて、心細い思いをして、働こうにも子供が小さいので働けなかったようなところに、突然ジープで進駐軍の兵士がうちに来まして、私を調べるんです。どうして調べるのかと思ったら、手紙で、満州では鉄道が破壊されていると書いたそうですねと言われました。私は、大変両極性の激しい女性で、以前は赤面恐怖症で本当におとなしい女性でしたが、そういうことになりましたら怒り出して、マッカーサーに直訴したんです。「主人を返せ」と。鉄道が破壊されていた頃、主人は、撫順炭坑というところにおり、そこから二万島まで鉄道が破壊されていて帰れない、それから専門が応用科学なものですから、むこうもなかなか帰してくれなかったんですね。一番まじめな人間をなぜ残しておくのか、飛行機で帰せと直訴したんです。そうしましたら、1カ月後に主人が本当に飛行機で帰ってきました。

後年、私昭和57年に保健文化賞をいただきまして、個人賞をもらった者は連れあいと宮中へ行きますが、その前に、第一生命から100万円いただいたりいろいろします。第一生命にはマッカーサーの部屋がそのまま残っています。宮中がひと目で見える場所です。マッカーサーという人は、質素な人で、船が好きで、船の模型と、船の絵がありました。中央に長いテーブルがあって、会があれば皆をそこに呼ぶ。普段は、その隅に腰かけて決裁する。私は何十年経って見まして、私が一生懸命書いた手紙があそこですぐ聞き入れられたのだ。そこが、日本の行政とアメリカの行政の違いなんじゃないかということを思いました。

まだ子供が小さくてうちにおりましたときに、五味百合子先生に、社会事業大学に会いに行き、いま医療ソーシャルワーカーを探しているからと、五味先生が、私の履歴書を東京都へ持って行って下さったことが、私が都に勤める契機だったのです。東京都に医療社会事業係として21年間勤めました。そのときに、WHO

からシドニー大学留学の機会が得られました。留学しなかったら、兵庫医科大学で、医学生に社会福祉を教えることにはならなかったと思います。70歳で定年になり、名誉教授になりました。

いま一生懸命になっておりますことは、社会福祉士が通ったのに、医療ソーシャルワーカーだけ通らないことです。とにかく、いままで医師が医療ソーシャルワーカー協会の会長で統括していたものを、厚生省の保健婦が統括している。ですから、「医師の指導のもと」ということは平気なんです。それで、やむにやまねず、私が医療ソーシャルワーカー協会の会長になりまして、あらゆるところと戦っております。どうしてそういうエネルギーがでるのかというと、やはり私は、日本女子大学の教室の片隅で初期の社会福祉というのを勉強した結果が、今日の私になっていると思って、日本女子大学を大変ありがたく思っております。

一番ヶ瀬 それでは、先生に引き続いて、私は、家政学部三類の卒業生としても発言するということだったので、司会を離れて申します。中島先生がストライキをして防いでくださったのですが、時代の移り変わりの中でやむを得ず、家政学部三類と名を変えて実をとつた時代がまいります。私が、家政学部三類に入るときは、これが、社会事業学部の後裔だということはよく知っておりました。その頃そういう種類のことを勉強しようと思うならば、ここしかないということもあって、選んだわけです。台湾の女学校からまいりましたが、その頃太平洋にはアメリカの潜水艦がおりましたから、私の乗った船の前と後ろは沈み、私の船も魚雷をうけて斜めに傾きながら神戸港に着いたということで、危うく命をとりとめて今日に至ったということです。

そういうことで全く戦争一色の学生生活でしたが、やはり三類などにいる人は、奇人変人扱いされたという傾向がまだ色濃くあった時代です。ただ、2つのタイプの人がいました。1つは、本当に社会福祉をやりたい人、もう1つは、家政学部という名がかえって無

難でいいし、他の学科は4年制だったんですが、家政学部三類はなぜだか3年制だったので短いからいいというようなことで入られた人と別れていたようです。家政学もかなりございましたが、私がそこで聞いた家政学にはかなり反発を感じまして、いったいこれは、本当に社会福祉に役立つのだろうかとしばしば感じました。というのは、日本の家政学というのは今でもそういう傾向が残っていると思いますが、どの階層の生活に焦点をあてた実学かという辺りが不明確で、どうもそんな料理を作るときと家計費にお困りじゃないかとか、そういう家政のあり方で、私どもが問題としていた貧乏の問題とどういうふうに関係するのかわからないままに、家政学を批判して学生時代を送りました。

その一方では、社会事業学部時代の先生がそのままおられて、熱心に教育をしていただいたことは、今でも、大変感謝しております。とくに中島先生がおっしゃった生江孝之先生は、私の時代が最後でございまして、私は最後の教え子ですが、本当に熱心にいろいろ教育して下さいました。生江先生の講義というのは、決して理路整然とはしていないのですが、お話をされる前にほろほろと涙をこぼされまして、皆びくりして見てると、その後、女性の肉体を売るということを法律で認めている国というのは他にない。こんなことが許されているのだろうか…また涙をほろほろと流され、悲憤慷慨された後、教科書は何ページから何ページまで読みなさいという講義だったわけでございます。理路整然でなかったもので、これで学問かなということ、いつも感じておりましたが、いま思うと、社会福祉というのは、別に体系的にしすぎて枠をつくる必要はなく、むしろ、そこで熱い胸を植えつけられたという印象を残しております。その外、綿貫先生からも、幅広いヒューマンなお話がありました。私たちの時代にひじょうに人気があったのは、社会心理学の桑田芳蔵先生です。無表情で、しかしものすごいアカデミックな講義をなさったのです。戦争中はそういう話

し方をあまり聞けず、いつもアジミたいな話が多かったものですから、私たちはひかれて、あれこそが本当の学問だなあと思ったりいたしました。

もう1つは、私は、外国の女学校から来たのですが、その女学校はほとんど男の先生が教えておられました。家政学部三類の主任は菅 支那先生で、受け持ちが菅先生だったのです。女で哲学をやられる方を初めて拝見して女の先生の生きざまから学んだということは、いまでも女子大学の良さだったのじゃないかと思っています。菅先生も熱血派で、やはりおっしゃっている事の論理はわからないのですが、無我夢中でプラトンの話などなると哲学というのはこんなに楽しいものかなということだけは、否応なしにわかるのです。すると哲学の本を読んでもみようかということになり、学生時代はずい分哲学の本を読んだ記憶があります。

そういうように勉強する気になった頃、勤労働員で2年間工場に行き、旋盤工をやっておりました。機械の音や油の匂いにまみれ、15時間労働です。当時は肉体労働でほとんど疲れ、学校へ帰って来る日が1週間に1日ありました。帰って来てむさばるように本を読んだり、整理したりして見つけたのが、「女工哀史」でございました。これには、ひじょうに影響を受けて、卒業後鐘紡へまいりました。鐘紡での生活は、いろんな意味で私にとっては、福祉の学問的な姿勢をつくる1つのきっかけになったと言えると思います。

もう1つ日本女子大学というところは女性の先輩との人脈的つながりが強いのが大きな特徴だと思います。学生時代から大変いい先輩方に恵まれていると思っております。具体的には、私より2級上で、今、主婦連で大活躍の中村紀伊さん、アジアの女子労働の問題で活躍しておられる塩沢美代子さんと、そういう方達と直接接して、いまなおいろいろなことをご相談できることは心強いことです。卒業が敗戦とともにですから、その敗戦後の激動期にはまだ学校にいましたが、本当にあの頃の激動期はすさまじかったのです。やはり家政学部三類というのはおかしいと、どうしても独立

したいということで、当時クラスに中学校の元校長の正田さんがクラス委員でいらして、それから仙台にいる前田 栄先生と一緒に、校長室に押しかけたのです。当時の校長は井上 秀先生で、そのとき井上先生がおっしゃったことをいまでも思いだすのです。「あなたがそんなに独立のことを考え、社会福祉について考えるならば、そして本当に女子大の批判をそれほど熱心につきつめて考えているならば、戻ってきて変えなさい」とおっしゃったのです。その一言がひどく印象的でございました。その後、色々な事情で戻ってまいりました。どれだけ学生時代の気持ちが実現できたかはわかりませんが、若い頃のそういう先生の一言は、意外と大きな影響を与えるものだといまでも思い出す次第でございます。そういうことで、35年間を送ったということです。

35年の間で私がひじょうに嬉しかったのは、大概たか先生はじめ五味先生その他諸先輩から社会福祉学科を卒業して残った人は、あなたが最初なんだ、いろいろつらいことがあっても、後輩のためにも頑張ってほしいという励ましをいただいたことです。これが、私がやめずに続けた理由の1つでございます。私は、いろんな回り道をして社会福祉をお選びになる方もそれなりの意味があるし、若き日、少女時代に社会福祉をやりたいという気持ちをもった人が、ずっとその種の仕事なり専門を続けることは、それなりにその方自身の思いや願いがあるわけです。初めに選んだ思いや願いを理解する先輩がいなければ、社会福祉学科は豊かにならないんだと言われて励まされたことは、肩にずしんと重荷を背負われ、しかし、励ましにもなったということです。そういうことで、いよいよ新制度になっていくわけですが、吉田さんは新制6回で、私は、吉田さんが2年生の時に助手で戻ってきました。きつといまの助手さんと同じく忙しく立ち回っておりましたので、その折接していたと思います。学生時代の思い出をよろしくお願いいたします。

吉田 一番ヶ瀬先生より10年ぐらい後の学生でした。

先生のお話を聞きまして、10年というのは、相当の違いだと感じております。私が、日本女子大の社会福祉学科を選んだのは、母の勧めなんです。母はちょうど中島先生と同じ年齢で、先生はすばらしい生き方をなさっているととても感心してお聞きしました。母は、昔、方面委員や保護司を30年ぐらいたしておりまして、いろんな人が家に出入りしているのを見て育ちました。その母が勤めたことと当時は社会と名前がつくのが新しい気がして入りました。先日、桜楓日記を見ていましたら、興味があるからやるのではなく、やっているうちに興味が湧くのだという言葉がありました。私はこれだったんだと思ったのですが、社会福祉の重みを感じたのは、やはり卒業してから後のことです。子育てしながらもいろいろ自分が育てられてきたと感じております。

学生時代は児童問題がさかんにクローズアップされて、私はユネスコ連盟にいたんですけども、目白祭で、横須賀の基地問題をとり上げました。左傾ではないかと、大橋先生などにずいぶんご注意を受けたことを思い出しました。

私は、いま民生委員の仕事をしておりますが、児童問題は、親が蒸発し残された子供や登校拒否、いじめの問題が多いのですが、当時は基地の子供の問題が深刻でした。いま現在は、老人問題が主になりまして、法律などを学ばなかったのが、民生委員の仕事をしていて、もう少し法律の知識もなければいけなかった、と感じております。

当時、菅先生の哲学で、一生懸命ノートをとるのですが、帰って見ると全然分からないのです。松本武子先生が主任で吉沢英子先生が私の回生のリーダーでいらっしゃいました。吉沢先生の歯切れのいい講義がとても楽しみだった頃がありました。一番ヶ瀬先生からは日本社会事業史をととても新鮮にお聞きしました。松本先生も、前田先生も、ご家庭をもちながら仕事をしておられたことにととても感激しておりました。いまでは、当り前のことですが、それで卒論には、既婚職業婦人

の問題を取りあげました。私もあんなふうにできたらいいな、という理想を感じておりました。当時からの友達に、小島先生とか、松島先生のお嬢様で、長谷川さんとか、活躍していらっしゃる方が沢山いらっしゃいます。私たちの頃は入学してからすぐ社会福祉学科に分かれず、名前でA B Cにクラスわけがなされていたので、その友達が各科に分かれていくのです。その頃まだ、社会福祉学科はそんなに人気がなかったのでしょうか、英文科に落ちたから来たという方もありました。最初からのクラス分けしたなかで、島田さんなど2・3名だけが社会福祉科で、最後まで一緒にいたしました。

家政学部の中になかったわけですから、家庭管理やお料理もとったわけなんです。教職課程をとるときに私は、家政科の方をとってしまいました。家政科だったら自信がある、できそうだという感じていたしましたが、もっとしっかり勉強しておけば社会にでたとき、役に立ったのと思いました。夏の軽井沢でもいろいろ勉強させていただき、いい思い出です。いま、新入生のために八王子セミナーなどなさっていると聞いて、本当に夢のような感じがいたします。

本当に学生時代はいい学生ではなく、不満というかハングリー精神を持っていた時代です。一橋や早稲田のゼミとか、東大のユネスコのクラブに行って戦争の問題の話しあいをしたのをよく思い出します。友達とは、授業が終わっても、いつまでも議論を続けたというのが、社会福祉学科ではないかと思います。キリスト教のプロテスタントとカトリックの話だけでも、とても議論が活発にできました。そういう意味では、切磋琢磨された友達が沢山あつたということは、社会福祉科ならではの感謝しております。

一番ヶ瀬 どうもありがとうございました。吉田さんの時代は、戦争がようやく終わって、どんどん物がまわりはじめたときですが、基地の問題やいろいろな問題があつた頃です。社会的な動きについては、学校は厳しく管理してた時期でした。しかしそれをものと

もせずに活躍していた人が多かったのが、社会福祉学科だったのではないかという印象ですね。それでは、新生9回で飯田さんよろしく願い致します。

飯田 社会福祉学科を選ぶということにつきましては、私は1年生の時、生物へ入ったんです。そして2年生のときに転科したのです。その時、転科した人が3人いまして、どうして社会福祉をやるのかと言うことを、菅先生、松本先生に聞かれました。ちょうどそのとき兄がシカゴの大学へ社会福祉を専攻して行った後だったので、その影響があったことと、社会福祉が、社会と直結する人間社会のなかに生きる1つの道ではないかというようなことをひじょうに強く感じて、変わりたいと申し上げて2年生から移ったわけです。

2年生から部分的に専門の講座が入ってきました。松島先生の児童福祉概論など入ってきて、施設見学なども始まり、ひととおり全部見せていただいて、施設というところは、まだまだ旧態依然としているという印象があり、学校で習う社会福祉と現場とが、かなり離れている印象がありました。

また、菅先生の哲学など本当にお話のとおりで、もう情熱だけが伝わって来て、それだけは感じさせていただいて、熱い思いというのを芽生えさせていただいたと思います。一番ヶ瀬先生の本当に整然とした政策論、それを聞いてあーなるほどと思い、松本先生のケースワークを聞くと、人間関係をどうやって作っていくのかという、どろどろしたなかにも何か一筋セオリーがあるということも感じさせられました。前田榮先生、いまは吉田先生でいらっしゃいますが、一番ヶ瀬先生と同期というお話でしたが、私の担任で、口ばかりな私達でしたから、先生を大変困らせたことと思います。

吉田先生もおっしゃったように、クラスの雰囲気には、一生懸命やるグループと、のんびりいきましようというグループとはっきり分かれている感じがありました。それはその色として、和氣藺々というような部分もあったように思います。そのなかでもやるという

人はやるといった感じで、それぞれの道を究めていたように思います。ちょうど卒業を機に文学部が変わりまして、私たちが文学部の1回になると思います。ですからお料理も家庭科も取りました。結果的には、文学部で卒業できたことを喜びました。家政学部社会福祉学科であるイメージと、文学部社会福祉学科というイメージの違いを感じ、これで堂々と胸を張って出れると感じたように覚えています。

2年生まで寮生活をしておりましたが、寮というのは、ひじょうに管理が厳しく門限もきちんとしておりましたし、勉強するために来ておりますから、ある意味では当然でしょうが、主体性を育てるといいながら、主体性を育てさせない環境だとすごく感じ、あまり四角四面でくくってしまうと、どこかに脱け道を探そうとするアクションが起こるのが当然なので、その辺ががんじがらめになる、イタチごっこなのかな、と思ったりしたこともありました。それが理由のすべてではないのですが、3年生のときに姉と一緒に下宿することになり、寮を出ました。それからは時間に制約されないで、話し込む機会も得られた気がします。話し込む仲間は、宗教的な関係のサークルであったり、学校のお友達であったりしましたが、人が生きるということについて、かなり突込んだ話し合いをした覚えがあります。

クラスの傾向として卒業後どうするかについては、ちょうどMSWがはじまった時期で、その方向へ行きたいという人もいたのですが、まだ制度化されていないなどで、なかなかでした。社会福祉の一般ということになると、コネクションのなかでいろいろ奔走していただいて、ご紹介いただいたりしました。教職も何人が受かったと思います。私達の頃はそれほど行政へは入っていないのです。案外、専門職に入る人が少なかった時期かと思います。私は、鉄道弘済会へ御紹介いただきました。元厚生大臣の堀木謙三氏の奥様が卒業生で大先輩でいらっしゃることもあり、弘済会へは毎年だれか就職していたようです。その福祉部長さ

んからデスクワークにつくにしても、現場を経由して来た方がいいというお話を伺い、異議がありませんでしたので、現場でしばらくやることになったのです。弘済会には、老人の施設も、知恵遅れの施設もあるからどちらでもと言われました。それまで障害者の問題は時代的にも念頭にありませんでした。ただ子供であるというだけで知恵遅れの方を選んだのです。入ってみますと、本当に、未開拓なフィールドで、教育を専攻した人、保母職の人が多く、福祉を専攻して入る人はあまりなかったようでした。

確かに知恵遅れですけど、人としては十分つながるという実感がしたこと、松島先生が講義でおっしゃった養護施設で、1人1人をどうキャッチするかを考えるとときに「等しい偏愛」という言葉を使われましたが、私は当時内容的にはどういうことなんだろう、数字の上では公式ができたのですが、実感ではありませんでした。それを思い出し、実際にやると、どういうことになるだろうとふり返り、講義通りに子供達と対応しようとする自分がスタートだつたと思います。それが、松本先生のケースワークに学んだプロセスが、知恵遅れだって十分そのセオリーにのるという体験ができて自信を持ちました。その後、障害者のフィールドは、まさにそこから、どんどん広がっていったという経緯がこの30年の中にあり、色々な意味で一緒に勉強させていただいたと思います。現場と学校で習ったことをどうつなげるかを自分のなかで模索しながら、魅力ある現場になることを考えています。現場に魅力がなかったら、いい人は得られない、いい人が得られなければ施策がいくら先行しても、実際の福祉は根づかないと思います。学生の頃も福祉というのは、救済対策とか問題を持った人たちへの施策だけでなく、もっと豊かな人間社会へ向う考え方の実践ではないだろうかと思い描いていたものですから、その点では、魅力ある現場をどうやって作っていくのか考えながらきました。そういう点からも、先生方からいただいた講義、先生方が歩んで来られた実践そのものが、私に大

変大きな力を与えて下さった気がします。

松本先生には大変お世話になりました。疲れ果てて、松本先生のおうちで休ませていただいたこともあり、そのときは、お疲れになっていらっしゃるのに、12時頃まで話を聞いて下さり、「そういう子供たちがいるの」とご主人様も一緒になって、そうかそうかと聞いて下さり、個人的な支えをいただいた時期を経たからいまがあるのだと思います。家庭をもち、子供をもちという節目にぶつかるとき、やめるのは簡単で、どうやって切り抜けるか知恵をしばらくなさいとおっしゃった言葉がとても参考になりました。続けていくということが大事なことであり、道がないところから道をおこし、道をつくるには時間がかかるからこそ、やはり続けなければならぬんだなということも振り返り思う次第です。

一番ヶ瀬 ありがとうございます。補足をさせていただきますと、あのとき、本来なら、社会事業学部、もしくは社会学部にしようと、研究室で運動をしたのです。けれども一挙にそこまでは無理だと、暫定的により自由がきく文学部へという結論になりました。それで、文学部へ移ったといういきさつがございます。これは、加えておきたいことと思います。文学部になると同時に、新しい先生をお迎えして、学問的基盤を充実させなければとお呼びしたのが、松尾均先生、江口英一先生だつたわけなのです。大野さんは、江口先生のゼミでした。では、よろしくお願い致します。

大野 学生時代は、社会福祉学科がなぜ文学部なのかという不満を持っていて、向山さん、川上さんといった先輩、助手の方から、家政学部から文学部になるのがどんなに大変だったかというお話をずいぶん聞かせていただきました。私は、子供時代病弱だつたので、何か社会に役に立ちたい、社会という名のつく所で勉強したいという気持ちがありました。親は、病弱だから職業をもった方がいいから薬剤師になれと勧め、1年目は、薬学部を受けて、落ちました。つぎの年は、自分の好きな学科に入らせてほしいと頼み、社会の名のつ

く学部、学科を探したわけです。親は、家から通わないのだったら女子大がいいということで、日本女子大に入れたわけなんです。女子大であることへの反発とか、文学部のなかで社会福祉をやらなければならないのはおかしいんじゃないのかという反発を感じていたように思います。

社会福祉学科4年間の中で、社会福祉学としての確立を目指して、経済学や社会政策を担当される松尾均先生、江口英一先生がいらっしゃいましたが、そういう社会政策、社会調査、あるいは経済学的なアプローチからの社会福祉というものに変化しました。私は、江口英一先生のゼミで、社会調査、社会政策を勉強しましたが、勉強したというより、何となくゼミのなかでわいわいやつていたという感じがいたします。3年、4年で、日雇い労働者の調査をしたり、千住本木の調査をしたりしました。とくに、江口先生は、失業対策、都市貧民層の研究をやっていたらしくて、とくに、日雇い労働者の方たちが、後楽園周辺や新宿の戸山、小石川で仕事をしているとき、お昼休み、お茶の時間、朝あるいは仕事が終わってから出かけて行っては、面接調査をしたことを思い出します。そのときの記録が3年くらい前に、20年ぶりですてられて来まして、とてもなつかしく見ました。松尾先生の経済学は、ずいぶん学生に人気があったと思います。逆に江口先生の講義は、「ボソボソ」という感じでした。数年前江口先生が出版記念のお祝いの会をしたときに、お年をきいたらまだ60歳くらいだったのです。すると私が学生のときには40歳ちょっとで、考えますと正に、新進気鋭の研究者でいらっしゃったのですが、その頃はひじょうに年をとった先生のような印象があり、先生も「僕は、ずいぶん年寄りに見られてたんですね」なんて笑いながらおっしゃられておりました。ちょうど高度経済成長期にさしかかり、産業構造も大きく崩れつつある中で、社会福祉を考えていくとき、社会調査などをとおして生活をどう見るかという目を教わったと思います。ゼミが十数人だったので、共通の親近感が強く、

20数年前に戻れるような友達がいつでもいるという感じがしています。

私は途中で教職課程を放棄しました。3年生までは教職をとるつもりでいたのですが、教えることに自信がなくなり、それで公務員試験を受けたというところもあります。4年生になって、教職でとらなければならない科目がなくなり、田端先生の農村福祉や、渡辺定先生が日本で初めて老人福祉の講義を開講されるということでそれを3年生と一緒に受けることができました。そこで私は、それまで経済や社会調査という基本的なところは見ていたのですが、実際の社会がどう動いているのか、とくに、農業の構造改善事業で農村がどう崩れていき、都市にどう人口が集中し、都市勤労者や都市の生活がどうなっていくのかを勉強しました。この2つの講義は、後に、婦人教育、家庭教育の施策を進めていくうえで、時代の中で、女性の生活がどう変化し、女性の課題がどう変わっていくのかということを考えるときに、ひじょうによかったと思いました。また一番々瀬先生からは、社会福祉事業概論、近代社会事業史の講義を受け、“クールな頭と熱い胸を持って”と、最初の講義で黒板に書かれたと思います。それは、ずっと心に残っています。熱い胸は、意外に持つことはできますが、クールな頭というのは難しいと最近とくに感じます。私は、女性の視点や女性であることにこだわりながら仕事をしたり、物事を見ることが大切じゃないかと思っています。熱い思いというのは、女性はわりと豊かに持てるけれど、冷静に考えたり理論的に考えるクールな頭と熱いハートを同時に持つのは難しいとしみじみ感じております。私が、3年4年の頃、田端先生が入られ、吉沢英子先生がグループワークの講義をされ、新鮮な思いで授業を受けました。

学生時代には女子大に対する反発が強く、卒業して、年が経つほど逆にそのことの良さを、ひとしお感じます。自治会の役員をさせてもらったりしましたから、そういう経験をととしても、女性だけで考え、決めて

いく経験は貴重でした。男性が自分をどう期待するかなどは全然考えずに自分の言いたいことが言えるし、決定できる立場にあれば、決定することができる。そういう意味で、女子大だったということがよかったと思います。女性の人脈についても、一番ヶ瀬先生からお話がありましたが、先ほども出ました中村紀伊先生には、仕事の上で大変お世話になっております。中村先生からも、私達の思いをどう後輩に伝えていくのか、例えば、中村先生は、主婦連合会や主婦会館をマネージメントされていらっしゃる、それをとおして、女性がマネージメントする能力、コミュニケーションする能力を体験的に身につけることができるし、そういう機会が若い人たちには多くなっているとおっしゃられます。「私達が苦勞してきた思いを伝えたいのよ。大野さんが伝えなきゃいけないのよ。」と、しょっちゅう言われております。いま、50歳に間もなくなくなるわけですが、そういった思い、私達の経験を次の世代に伝えていかなきゃいけない役割があるということを、この良き先輩とそして活躍する後輩の間に立って、考えております。

一番ヶ瀬 ありがとうございます。ちょうど大野さんの頃は、60年安保のときですね。

大野 60年安保の年に入学しました。

一番ヶ瀬 熱烈な議論もなされたときですね。あの60年安保は、日本の1つの重要な歴史的な事件でしたが、女子大もその頃から変わりははじめました。自治会が熱気を帯びてきて、それまでどちらかというと管理的だったのが、上代先生が学長になられ自由になり、自分で責任を負って行動するような教育方針に変わり、ゼミ重視そして職業をもつ人に積極的に便宜をはかるような動きが学内にも満ちてきました。社会福祉学科は、そういうことの先頭に立っており、上代先生を支えた時期なのです。それから10年後の、小沢さんの学生時代の思い出をお願いします。

小沢 私が、大学に入ったのは、71年でした。69年に、沖縄の返還が決まり、いろいろ終わっていて、遅れて

きた人間達といわれる時代でした。私の頃は、学内の問題に目を向けてきた時代でした。皆が学生運動から遊離していった時代でした。私自身学費問題だけは、自分の問題として頑張ってきたという印象なんです。私が、社会福祉学科を選んだのは、社会に関わりたいため、職業選択分野が広いのではないかと、就職と結びつけて選びました。本当は、男女共学の社会福祉学科に入りたかったのです。女子大に福祉学科があることを知り、受験しました。合格すると親達が大喜びして大賛成してくれました。その当時は日本社会事業大学、日本福祉大学など、単科の社会福祉の大学がありましたが、私は、運良く総合大学に入ることができ、よかったと今も思っています。あのとき、単科の大学に入っていたらもっと、かちんかちんになっていたんじゃないかと思います。当時は、ウーマンリブが盛んでしたから、女性の目でしっかり世の中を見たいと考え、思う存分に過ごしました。いま考えると、社会福祉学科の中では政策論と技術論という感じに別れていて、政策論的な方面の方がとっかかりやすいようでした。というのは、世の中のしくみなどを知るのに政策論はわかりやすかったと思います。技術論は教科書はいまはとてもいいのですが、その当時の教科書は、翻訳もので、ピンとこないというか、身近に感じられなかった印象があります。いま、ケースワークをやっていますが、その時習った本を現場に入ってから5年ぐらいいして見るとやっとピンときたという経験があります。

印象的なことは、入学直後の八王子セミナーでした。あの時の部屋割りで友達ができました。私の学年は、100人と多い人数でしたが、あのセミナーでたくさんの人と知りあって、そこから友人関係ができたと思います。セミナーハウスの宿舎で夜を徹して話し合ったことを覚えています。その後、一番ヶ瀬先生が「社会を自分達の手で見なさい」「どんどん大学の外に出ていきなさい」と言われたように覚えています。たまたま1年の後半に、友達からセツルメントを紹介してもらい、そこはちょうど60年安保の後で創立したという

セツルメントで、卒業するまで、小学校1・2年生、幼稚園や保育園の子供と毎週土曜日の子ども会活動に参加しました。そこで、お母さんたちと話したり、教育問題を考えたり、社会問題を考えたり、土曜日はいつも、アルバイトもせずに活動をしていたという感じでした。他の大学の人達がいたので、組織の運営のしかた、人間関係などを学んだと思います。1年生のとき、友達の1人が肺ガンにかかり、翌年4月に亡くなったという、体験をしました。その友人の死はとても印象的なできごとでした。

ゼミは、一番ヶ瀬先生をとりました。あまり真面目な学生ではなかったので、先生には印象的でなかったかもしれませんが。先生はとても人気があり、20人以上集まってしまい、ゼミでは老人問題を、セツルメントでは子供や教育のことを考えたりと、がむしゃらにやった感じがあります。最初に言われたことは、「基礎的な学問を一生懸命やりなさい」ということでした。一般教養も大事だと言われ、法学、社会学、宗教学などをとりましたが、結構おもしろい科目があったと思っています。

卒業時に、先生に「10年は働きなさい。その職場でものがいえるようになりなさい。次の職場を用意してからやめなさい」と言われましたがもう14年も続いています。何度もやめたいと思いながら先生の言葉が心強く残り、やっと11人というメンバーがそろそろ1年の年になりました。最初は4・5人で、どんどんやめる人がおり、1年に1回送迎会をするような職場でした。職場の管理上の問題や、仕事の問題、たとえばケースワーカーは身分が確立してない仕事ですので、医師や、看護婦の中で、無我夢中で走りまわるような状態で、頑張ってきました。そういうとき、女子大で色々学んだことが、すごく役に立ったと思います。クラブ活動やセツルメント、間接的ですけど友達との話し合いなどが反映されたことが多かったように思います。

一番ヶ瀬 ありがとうございます。小沢さんの頃は、

大学紛争の後ですね。私共は、学生に信頼される良い学科に作りあげようと必死の時期でした。八王子セミナーもその一環として、昭和44年から始めたものです。それが印象的だった、よかったと聞いて、とてもほっとしています。その頃から、私は政策論と技術論の対立よりもむしろ統合ということを考えておりました。もともと政策論というのは、ドイツ社会政策論の影響がひじょうに強いし、技術論は、アメリカのソーシャルワークの影響が強いのですが、1つの問題を対象としながら、やはり統合されるべきであろうと考えていたわけですね。その統合の媒介に、法律をもってこなければ、不十分だということで、大学紛争の後、佐藤進先生をお呼びしたのです。お呼びするのに、金沢まで何度か日帰りで行きました。兼六公園でのデートなんて佐藤先生はいまでもおっしゃいますが、いろいろな思い出が浮かびます。おかげさまで、社会福祉学科は、その後、段々充実してまいりまして、受験者数も増えました。大学紛争の後10年ぐらいいは、厳しい目でみられましたが、ようやく立て直してきた時代だったのです。原沢さんは、佐藤先生のゼミですね。

原沢 はい、私は、将来仕事をもっていけたらという漠然とした思いがあり、佐藤先生はそういう労働問題などをやっていらっしゃったので、ゼミに入りました。なぜ女子大へ来たのか思い起こしてみると、私は、男ばかりの兄弟なので、学校へ行って、仕事をするのが当たり前の雰囲気の中で育ち、たとえば英語をやるよりこういう学科の方が、仕事の役に立つのではないかという高校の先生の助言もあり、選びました。単科大学でなくてよかったということは、私も本当に感じています。社会福祉学科の講義をきいている学生もいれば、一生懸命、実験ばかりやっている友達もいるなど、いろいろな人がいることを感じました。そういう友達とのつき合いがもてたことは、とてもよかったと思います。女子大であるということについては、私も、サークルをやっていましたが、外部との折衝、荷物運びなど全部女だけでやるのがあたりまえでした。

こういった形や考えでいいのではないかという気持ちを持って社会へ出ました。おかげで、いま、家庭を持ちながらやっていますが、主人が洗濯しても、台所に立っても抵抗なくやってもらっています。

佐藤先生の講義の中では、行政に対する考え、批判をとおして、福祉というものは、甘くない、思い通りにはできないんだぞというようなところを感じました。そのように学んだものを行政の部分で生かしたいという思いが、公務員になった経過につながりました。現在の児童相談所という職場は、それほど行政をふりかざすところでもありません。ケースワークの1対1の関係でやっていく部分が大きいところです。八王子セミナーのとき、一番ヶ瀬先生が「冷たい頭と熱い胸」とおっしゃった言葉がいまも印象深く残っていて、それは10年来仕事をしてきても、相手に対する気持の持ち方はどんなケースであっても、こちらが、好きになれる相手とは、うまく運ばないということを、経験として感じています。ただ相手に同情するのではなく、もっと客観的な、立場、見方で調整していくことが、相談所という機関では、必要なのだと思っています。

子どもの問題より、ときには親の問題の方が主流になってしまう場合が、相談所の場合たくさんあります。そこで親がどうしてそう考え、どのように子供を見ているのか知るにあたり、親の生きてきた時代や背景などを、社会福祉学科のなかで歴史的な、あるいは、経済構造の裏側みたいなものを理解できる、講義の機会があったということがいい経験だったと感じています。たとえば集団就職で地方から上京してきた人が親になり、子供に期待して、どうしても高校に行かせたいと思いこんだり、強制して起こってくる問題、ひと昔前だと、サラ金の問題、最近ですと、フィリピンから出かせぎに來た女性に、子供ができてしまって、強制送還になるまで預からざるを得ないというような、社会とのつながりの中で子供の問題が起きています。私がかかわった、たかだか10年間にもいろんな経過が流れ

ていることを感じています。そのなかでの私達の仕事は施設入所に関し、施設に入れられる子供はどう思っているのか、もう少し踏み留まって考えるようにして、施設は最後の手段と考え、親が何で困っているのか、他に問題は解決していく手だてがとれないものかという調整をするようにしています。その人のために、自立していく手だてを一緒に考えるとき、女子大で学んできたものが、学生のときからの基本的な姿勢として生きているのではないかと思います。またそういう姿勢をこれからも保っていかなければと思っています。

仕事を続けてこれたことの中には、学科の先輩方が社会に貢献してきたことと、何かの形でつながっていることに、助けられているのを感じます。公務員は、結婚しても続けられていいわねと言われることがありますが、決してそうではなく、そこには私達の先輩の保育所の運動とか、育児に伴う休暇の関係の運動とか、組合運動とか、自分達の問題を自分達の権利として話しあい勝ちとりながらやってきた結果があると思います。私自身10年経ちましたが、ここでやめられない、後に続く人達のためにも、前に道を開いて下さった方々のためにも、自分の責任があると思っています。私自身、5才・3才・0才と3人女の子がいますが、1人めの子供を生んだときは産後8週間程で仕事につき、3人めの子供を生んだときには、保母や先生と違い育児休業はまだありませんが、埼玉県的一般職員でも育児欠勤という形で、産休後84日間までにとることができました。3人めの子どもは生後3ヶ月半まで一緒に過ごすことができ、働き易くなってきました。こういう権利や、家庭と仕事が両立できる状況が、なるべく多くの女性の方に広がっていく社会に、進展して欲しいと感じています。

一番ヶ瀬 ありがとうございます。先程、政策論と技術論の統合を教育の場でも積極的に考え、学園紛争のなかで問われた問題を解決していこうと、方法論の方から努力をしていただいたのが小島先生なのです。小島先生の社会リハビリテーションは、そういう意味

で大変重要な展開につながったと思っています。小山さんは小島先生のゼミで、アメリカにいかれ、いまそれを実践に移されていかがですか。

小山 政策論と技術論は、小島ゼミの中ではマクロとミクロの往復という言葉で用いられ、ずっと信条としながら勉強してきました。

大学に入った時代は、今の原沢さんの時代とそう変わらないと思いますが、かなり軟弱時代になってきておりまして、いろいろな方がおりました。受験勉強は一生懸命し、入学したら遊ぶという雰囲気もありました。自分はそうはしない、入学したら勉強するという、いまにして思えば硬派のつっぱり型の、鼻持ちならないものを持っていたようです。それでも勉強のたのしさを知ったときだったと思います。小島先生のゼミで障害者福祉という分野に入りました。障害者福祉が一部の問題という雰囲気があつたなかで、それを一部と感じさせる全体の問題があるということで、「偏見」をテーマに勉強してみたかったのです。とくに障害者の雇用に焦点をあてて、勉強させていただきました。飯田先生の施設で実習をさせていただき、初めて、障害を持った、とくに精神薄弱の方達と接したとき、目の前が変わるような思いがしました。

私は、大学入学後すぐに両親の仕事の関係で休学をし、スイスのジュネーブに滞在をいたしました。語学の勉強はもちろんですが、18才という多感な頃に、自分を積極的に打ち出していかないと、何も理解してもらえないヨーロッパ社会の厳しさ、文化の差を肌身で感じました。その影響を受け、帰国してみると国際化社会だとか国際的人間と言われていた状況で、それが何かというと、偏見でなく、いろいろな人の違いを認め、お互い理解しあっていける視野を持った人間のことでないかという気持ちになりました。私が、「偏見」について考えていきたい気持ちを、支えることになったと思います。大学では障害者雇用について勉強し、日本には割り当て雇用制度があるが、アメリカにはない、どこそこにはある、それは文化の差もあるの

ではないかと思い、卒論にいたしました。一般教養の中では清水知久先生の国際関係論を受講して、戦争と平和についての視野が開かれたということが、私にとって印象的な経験でした。それから中野卓先生の社会構造論や社会学概論がひじょうに印象的でした。小島ゼミでは障害者福祉ということで、雇用主へのきき取り調査などをとおして、「偏見」についてはまだまだ結論は出てこないのですが、それをずっとつなげて勉強のテーマとしてきているという気がします。障害の重い人たちと実際に接するという体験、アメリカの大学院での勉強の両方から少しずつ蓄積できたら幸せだと思っています。

大学時代に、学生自治会の会長を一期勤めましたが、体制や、学校のあり方をいう一方、当時の学生自治会のあり方にも矛盾があり、自分自身の頭でものを考えなければいけないのではないかと、生意気を言う堅い学生時代だったのです。他大学から合ハイとか合コンとかの申し込みが自治会にあってそれを70年館に貼ります仕事があったのですが、自分自身は一回もいったことがありませんでした。つばっっていてどこかで何かを失ったような気もするのですが。

勉強は楽しくて、小島先生の御紹介もあってミシガン州立大学へ行きました。文化の差を認めつつそれなりの生活があることを勉強できました。アメリカでは、ターンオーバー、離職が多く、それをくい止めて、コストを下げようという動きがあります。日本でいう、会社の福利厚生みたいなものを考えコストをおさえるものです。日本が遅れているとは必ずしも言えず、それぞれに生き残るやり方を見つけていく姿を、今後求め続けていきたいと思っています。

今後の学科に期待すること

一番ヶ瀬 小山さんの時代あたりから、お父さんのお仕事の都合で外国生活をされたり、留学されたり、最近では4年間に必ずヨーロッパやアメリカ、中国等に行く人も増えております。学生が国際的体験を豊富に得

るようになってきたというのが1つの特徴だと思います。これから本当の意味で国際人に育っていく時代に入っていくと思います。人間社会学部というのは、21世紀に向って、まさに高度技術化、情報化とともに、とくに高齢化と国際化に備え得る学部として、いままでの社会福祉学科の良さを生かし、さらにどういう点が期待されるか、また、今の時代のあり方等含めて直していくべきところなどお話いただければと思います。研究室では米地実先生が20年間の御勤務のあと、昨年専修大学へ行かれました。中川清先生が少し前に慶応大学で博士号をとられました。今度は幸津先生が東大の倫理を出られてドイツに7年間学んで、ドイツの博士号をとられ今年からお入りになられたという移動がございました。このような動きの中で何か後輩に期待することでも結構です。小山さん、アメリカの大学の経験をとおして日本女子大の足りないもの、またこうなればよいと思うことがあればどうぞお願いいたします。

小山 人間社会学部という学部名を伺って、幅広く、ひじょうに嬉しく思いました。私はアメリカでカウンセリングの方法論なども学び心理学的な側面も学んだ体験から、弱冠そういった面が女子大の講義の中では薄いという気がいたします。現場ではどういう知識をもって人に接するのかという方法論的な面が、確立されているようでされていないのです。私の職場だけではないと思いますが、経験が大事だと言われます。しかし、何かみんなが共通に持てる「方法」があってもいいのではないかと気がしています。大学院で学んだシステマティックカウンセリングというカウンセリングのプロセス論について学習会を開き、職場のみんなで本を読みながら勉強しているところです。私の学んだアメリカの大学院では、実習を1期間、1年4学期なので3ヶ月行い、さらにインターンというフルタイムの形で働く期間がほぼ半年ありました。「現場」と「大学」でもっとお互いがお互いを知る、役に立てる交流があればという気がいたします。

一番ヶ瀬 ありがとうございます。方法論の理論的整理というのは本当に大きな課題ですね。これをどうするかは日本の社会福祉全体の課題だと思います。今後新学部が完成したあかつきには、さらに思いきって充実していきたいし、いまおっしゃったような色彩を強くしようという動きがかなりあります。現場と理論が交流し、お互いに協業と分業がうまくできればと思っています。実習は、今度の国家試験の関係で4週間になりましたから、以前にくらべれば充実しただろうと思います。日本は風土の違いもあり、現場との関係は難しいですね。その点、飯田先生いかがですか。

飯田 学生自身の中で意識がどちらに向いているのか、学校にいる間に、方向づけてやるのが大切で、十ば一絡げという形はとらない方向をとっていただいた方がいいのではないかと思います。社会福祉のフィールドは間口が広いために社会福祉全域の基本があり、その上にそれぞれの専門コースがあるという形になっていくと思いますが、その専門コースの領域はかなり深いわけですね。間口の所で理解したレベルで現場にきたのではとても通じないといえます。ある意味では現任訓練を長く続けることも大切です。現場というのは、単なるアカデミックではなく、アカデミックなものを導入する土壌を生まなければならないし、もっと整理した形で展開していかないと、お金ばかり使っているという場になってしまいます。そういう意味でももう少し効率を上げるために、現場と学校が人材養成の面でかねあいがとれるといいと思っています。

心理の領域は確かに弱いかなと思いました。私など福祉しかわからず現場に行きまして、特殊教育的な部分を学び直しました。低所得者の人達の心理やハンディキャップのある人達の心理、その層の中から出てくる傾向というものがあるので、人を理解する上での知識としては必要かと思います。特に大学卒の人たちは自分の判断基準をもっているのです。その基準に該当しない相手が大勢いることを知るところから始まるわけです。自分の範疇に入らない人は避けてしまったり、相手が

分からないということで傷ついたりすることも無気にしも有らずですので、その器量では社会福祉の現場には難しいという感じがします。そういう意味で心理という層の厚さと深さを学ぶ必要があるかと思います。

一番ヶ瀬 心理学科が今度の学部の中にできますから、そういう面での融通はきくと思います。また心理学をやるだけでなく、個性性への感性と接近の仕方ですね。

飯田 4年間では無理なのかなという気がしますね。

小沢 私もさきほど大学時代に学んだことにプラスして現場では対人関係理論の理解をしていかないと、何も援助できない、つまり熱い心だけでは現場ではやっていけないことを感じました。現場を知るために実習しますが、いろんな現場を知ることができ、かつ人間を援助するための理論も勉強できるというのがいいのですが。

一番ヶ瀬 そういう意味では、社会福祉は、生涯かけて、自分の人生の体験を重ねながら、ますます成熟していく種類の専門で、生涯学習ということが不可欠なのです。大野さん、生涯学習については文部省でいま、ひじょうに積極的に提えているようですね。どうでしょうか。

大野 私は直接福祉に携ってはいないのですが、伺っていて、社会福祉が、今後は人間社会学部のなかで、アカデミックにさらに、現場に直結するような学問と研究、教育がなされるだろうといった期待を強く抱いております。先生のおっしゃった社会人入学や留学生、推薦入学などについては、文部省でも今後積極的に推進していこうとしています。

生涯学習は、人びとが生涯の各時期に学校教育だけでなく、生活上、職業上などそれぞれが必要とする学習を選択的にできること、また、科学技術の進展や時代の変化に対応した学習が重要となることをめざしています。そのため、大学はより社会に開かれたものになることが期待されています。あと4年ぐらいで大学入学該当年齢人口は減り始めていくわけですが、生涯学習という考えは、受験戦争や偏差値や学歴を否定して、生涯とおしていつでも必要な学習が、大学という

が高等教育をも含めて、できるようなシステムを作っていくことをねらいとしているのです。そういう意味で、人間社会学部が社会人や、子育てが終わっても一度勉強しようという女性の要望に対応し、個別の課題を引き出す役割をもつことも重要だと思います。いま、社会教育のリーダーにもカウンセリングやコミュニケーション能力が重視されています。社会人入学や、聴講のシステムだけでなく、新学部のなかに附属センターを設けこれからの女性たちが生きていくうえでもつまやつまやとしたものを相談したり、1人ひとりの広い意味での学習をリフレッシュできる機会が得られるようにしていただけると、生涯学習の学習機関になっていくのではないかと期待するのですけど。

一番ヶ瀬 実際に現場に出ておられる方が、福祉をもう少しやりたいといって入って来られる方向にしろということでしょうか。

大野 桜楓会が人材銀行として、卒業生の社会参加の機会づくりを一生懸命やってらっしゃるようですが、もっとリフレッシュしたい、もう一回勉強し直したい気持ちをもつ人も多いと思います。情報が多様化し、方法論がこれだけ変わってきているなかで、時代に適應できないとか、自信がもてなくなることも結構あると思うのです。

中島 みなさんのお話を伺って、単科の社会福祉の大学でなくて、総合のなかの社会福祉学科を卒業してとても良かったとおっしゃいましたが、私、そこがこの大学の良さだと思います。socialの意味の中に“参加する”“統一する”という2つが含まれていますが、先生のおっしゃる生涯学習というのは、長い時間をかけるものだと思います。だからこれからだと思うのです。

小沢さんでしたか、在学中技術論の本はアメリカの翻訳ものばかりだったとおっしゃいましたが、先日社会事業大学の先生ともお話したのですが、日本というのは、何か統合的に入ってこないんですね。ケースワークでも危機論なら危機論ばかりになり、それを生活

にどう適用するかということではなかったからです。実習についても受け入れる本当にいい施設があるかということも問題だと思うのです。大学と施設の両方で努力しあっていかなければいけないと思います。一番ヶ瀬先生が、これから経験者を受け入れたいとおっしゃったこと、とても嬉しく思いました。私たちも勉強し直さなかったら、今の学生に教えられません。

いまひとつ全国の医科大学生で福祉に興味ある学生に滋賀医大の中川米造先生と毎年ワークショップに参加しています。福祉に興味をもつ医者がたくさんおります。そういう人をもっと求めることがひとつあると思います。

いまでも私でないと困るという家庭があって、毎月2回ぐらい家庭訪問しています。昭和30年にヒ素ミルク事件が起こり、それで現在33歳の人で寝たきりのケースなのです。教育部門からも先生方がかかわっているのですが、その先生は“障害者”として見ているので私は気に入らないのです。

飯田 ええ、違います。

中島 介護福祉士ができたからいいのですが、施設の老人の下世話などは低い職業だという考えもありました。

原沢 施設といえば、埼玉県の児童福祉施設もさまざまな問題をかかえています。県から支払われる措置費では、熟練した職員に給与を上げて支払えないため保母や指導員があまり定着せず、若い保母だけで回転しています。高齢化する養護施設で子どもの問題を扱いきれないこともあり、施設のあり方を変えていかなければならないのではないかと思います。

一番ヶ瀬 施設長の資格制度ができていないところにも問題がありますね。

飯田 コミュニティケアを根づかせるために施設の役割は基盤として必要です。施設の機能を考え、職員たちがきちっと役割認識をしていかないと、地域で在宅生活を助けるための施設にはならないと思うのです。

原沢 入れたきりでなく、必要なとき一時的に利用で

きる施設がほしいですね。

飯田 目的をもった入所ですね。たとえば自閉症児の利用施設としての役割などです。

小山 施設に働いていても刺激が受けられ、問題を認識できる機会は大切ですね。

一番ヶ瀬 いま大学院を夜も開こうという考えもあるのです。ただ学校全体の体制のなかで実施に移すのはなかなか困難なのです。そこでいまま私の大学院の授業は佐藤進先生と隔週交替で土曜の午後を使い勉強したい現場の方にも機会を開いているのです。それでこちらも勉強になるのです。何か吉田さん、いかがですか。

吉田 私は、私の立場からお願いしたいのですが社会の底辺の問題を毎日扱っています。問題がひじょうに多岐にわたっていますので卒業生が気楽に再教育がうけられるように、そういう卒業生のためのセンターみたいなものを作っていたいだきたいと思います。障害者の電話などをとってましたら、病気という医療の面ではある程度解決できるのですけれども、病気のために心が不安定で心が病んでいるという部分がひじょうに難しく、そういうことを話し、学ぶ場がほしいと思っています。

一番ヶ瀬 民生委員というのは、女性がどんどん増えていくといいと思うのですが、女子大の社会福祉科卒業の方も結構おられますね。これからますます大切な活躍の場となると思うのです。

お話がいろいろ出てまいりましたが、これだけ一言付け加えたいとか言っておきたいということがありましたらどうぞ。

大野 卒業生の立場で先程は話してしまいましたが、社会教育と生涯学習の立場から、ぜひ地域に開かれた大学にしていきたいと思うのです。これは決して、学歴主義をおおることではなく、住民の高度な学習要求に対して大学は応えていかなければいけないし、それだけ学習の需要が高度化していると思います。

一番ヶ瀬 ありがとうございます。それはぜひやりた

と思っています。いろいろ大変いいことをいっていただきましたが、歴史の移りかわりのなかでも大学と学生のかかわりかたも変わってまいりました。かつては学生はリーダーと、最近ゼミの教師と接触をもっています。いまは学生数が多く20数人のゼミだったりします。

飯田 私たちの頃はそんな体制ではありませんでした。ゼミ活動が少なかったのです。

一番ヶ瀬 どの時代もそれぞれ大変でしたね。私の学

生時代は、学徒動員から戻れば夜は私は寮の警備隊長でした。寮が焼けずに残ったのは私たちの功績なのです。(笑)そのおかげで図書館も焼けず、お茶の水より1年早く新制大学の認可が下りたといわれたこともあります。

これから新学部で、先生方とともに努力をいたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。お気づきの点はどうぞ教えて下さい。

今日は、本当にありがとうございました。

社会福祉学科の歩み

学 科 の 変 遷	
1901 (明治34.4)	日本女子大学校創設
1918 (大正7)	社会事業講座開設
1921 (大正10.9.25)	社会事業学部開設 女工保全科、児童保全科設置
1933 (昭和8)	家政学部三類となる
1944 (昭和19)	家政科管理科に科名変更
1946 (昭和21)	家政科社会福祉科に科名変更
1948 (昭和23)	新制大学として家政学部社会福祉学科となる
1958 (昭和33)	文学部社会福祉学科となる
1960 (昭和35)	社会福祉学科セツルメント、足立区に設置 (のち日本女子大学家庭福祉センター)
1975 (昭和50)	大学院文学研究科社会福祉学専攻博士課程前・後期設置
1990 (平成2)	人間社会学部社会福祉学科設置 (予定)